



曾義

秋經
物

語記

全全

(岡山製本)

大正二年一月二十八日印刷
大正二年一月三十一日發行

有朋堂文庫
義經記・曾我物語
(非賣品)

編輯者兼
發行者

三浦理

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者

平井登

東京市本所區番場町四番地

印刷所

凸版印刷株式會社分工場

東京市本所區番場町四番地

發行所

有朋堂書店

東京市神田區錦町一丁目十九番地

不許複製

緒言

義經辨慶の武勇談、曾我兄弟の讐討は、我が國民の間に語り傳へられたる物語の中、特に勇ましく、特にあはれ深く、よく國民性に契合して人氣あるものの一にして、随つて、古來の文學美術の材を之に採りたるもの、殆ど指を屈するに堪へず。而も肇めて之を結構鹽梅して、趣味饒かなる一篇の詩的物語となし、此英雄譚をして永く國民の間に不死ならしめ、後世の文學者美術家の爲に、好箇の題材を提示したるは、實に本卷收むる所の義經記曾我物語の二書なりとす。

二書共に、從來室町時代初期の作物として認めらるれども、孰れも其作者を詳にせず。曾我物語は、眞字本以下異本類本頗る多く、そのいづれが最も

原作に近き歟は、尙大に學者の討究を要すべき所たり。今は貞享四年の刊本を以て底本とし、參するに寛文三年本、和田信二郎氏の和州忍辱山本等を以てせり。義經記に至りては異本と稱すべきものなく、類本も亦稀なり。今は元祿十年の刊本を底本とし、同二年刊行の別本を以て參照せり。其他覆刻につきての用意は、一に他の本文庫本に同じ。

鳥野幸次氏は、本書の校訂につきて助力せられたる所多く、黒川眞道和田信二郎二氏は、祕籍の借覽を快諾して校訂上多大の便宜を與へられたり。特に記して謝意を表す。

大正二年一月

校訂者

武

笠

三

目次

義經記

卷第一

- 一 義經都落の事……………一
- 二 常磐都落の事……………二
- 三 牛若鞍馬いりの事……………六
- 四 正門坊の事……………八
- 五 牛若貴船詣の事……………一〇
- 六 吉次が奥州物語の事……………三
- 七 遮那王殿鞍馬いでるの事……………一八

卷第二

- 一 鏡の宿にて吉次宿に強盗入る事……………三
- 二 遮那王殿元服の事……………三〇
- 三 阿野の禪師に御對面の事……………三三
- 四 義經陵が館を焼き給ふ事……………三四
- 五 伊勢の三郎義經の臣下に始めて成る事……………三六
- 六 義經秀衡に御對面の事……………四四
- 七 鬼一法眼の事……………四七

卷第三

- 一 熊野の別當亂行の事……………七
- 二 辨慶生るゝ事……………七
- 三 辨慶山門を出づる事……………六
- 四 書寫山炎上の事……………六
- 五 辨慶洛中にて人の太刀を取りし事……………八
- 六 義經辨慶と君臣の契約の事……………九
- 七 頼朝謀叛の事……………九

- 八 頼朝謀叛により義經奥州より出で給ふ事……………一〇三

卷第四

- 一 頼朝義經に對面の事……………一〇五
二 義經平家の討手に上り給ふ事……………一二一
三 腰越の申狀の事……………一二五
四 土佐坊義經の討手に上る事……………一二八
五 義經都落の事……………一三八
六 住吉大物二か所合戰の事……………一五〇

卷第五

- 一 判官吉野山に入り給ふ事……………一五七
二 靜吉野山に捨てらるゝ事……………一六四
三 義經吉野山を落ち給ふ事……………一六八

- 四 忠信吉野にとゞまる事……………一七三
五 忠信吉野山の合戰の事……………一七九
六 吉野法師判官を追ひ掛け奉る事……………一九四

卷第六

- 一 忠信都へ忍び上る事……………二〇九
二 忠信最後の事……………二一四
三 忠信が首鎌倉へ下る事……………二二〇
四 判官南都へ忍び御出ある事……………二二三
五 關東よりくわんじゆ坊を召さるゝ事……………二三八
六 靜鎌倉へ下る事……………二四一
七 靜若宮八幡へ參詣の事……………二四九

卷第七

- 一 判官北國落の事……………二六六

二	大津次郎の事	二七六
三	荒乳山の事	二八三
四	三の口の關とほり給ふ事	二八五
五	平泉寺御見物の事	二九四
六	如意の渡にて義經を辨慶うち奉る事	三〇四
七	直江の津にて笈さがされし事	三〇九
八	龜割山にて御産の事	三二〇
九	判官平泉へ御着の事	三三四

卷第八

一	次信兄弟御弔の事	三三七
二	秀衡死去の事	三三二
三	秀衡が子共判官殿に謀叛の事	三三五
四	鈴木の三郎重家高館へ參る事	三三九
五	衣川合戦の事	三四〇
六	判官御自害の事	三四七

曾我物語

卷第一

七	兼房が最後の事	三五三
八	秀衡が子共御追討の事	三五三
一	神代の始の事	三五七
二	惟喬惟仁の位争の事	三五八
三	伊東を調伏する事	三六三
四	同じく伊東が死する事	三六六
五	伊東の次郎と祐經が争論の事	三七一
六	頼朝伊東の館にまします事	三七七
七	大見八幡か伊東を狙ひし事	三七九
八	杵臼程嬰が事	三八〇
九	奥野の狩座の事	三八八
十	同じく酒宴の事	三八八

十二	おなじく角觚の事	三九二
十三	費長房が事	四〇二
十四	河津三郎うたれし事	四〇四
十五	伊東が出家の事	四一一
十六	御房が生るゝ事	四一二
十七	女房曾我へうつる事	四二三

卷第二

一	大見八幡を討つ事	四一五
二	泰山府君の事	四二七
三	頼朝伊東におはせし事	四一九
四	若君の御事	四二二
五	王昭君が事	四二四
六	玄宗皇帝の事	四二五
七	頼朝伊東を出で給ふ事	四二六
八	頼朝北條へ入り給ふ事	四二八

九	時政が女の事	四二八
十	橘の由來の事	四二九
十一	兼隆を聳にとる事	四三三
十二	牽牛織女の事	四三四
十三	盛長が夢見の事	四三五
十四	景延が夢合の事	四三六
十五	酒の事	四三七
十六	頼朝謀叛の事	四三九
十七	兼隆が討たるゝ事	四四三
十八	頼朝七騎落の事	四四四
十九	伊東の入道が斬らるゝ事	四四五
二十	奈良の權操僧正の事	四四六
二十一	祐清京へ上る事	四四八
二十二	鎌倉の家の事	四四九
二十三	八幡大菩薩の御事	四五〇

卷第三

一 九月十三夜名ある月に一萬箱王庭に

出でて父の事を歎きし事……………四五三

二 兄弟を母の制する事……………四五五

三 源太曾我へ兄弟召しの御使に

行きし事……………四五六

四 母なげきし事……………四六〇

五 祐信兄弟をつれて鎌倉へ行きし事……………四六四

六 兄弟を梶原請ひ申さるゝ事……………四六五

七 由井の濱へ引出されし事……………四六八

八 人々君へ参りて兄弟を請ひ

申さるゝ事……………四七〇

九 畠山重忠請申さるゝ事……………四七三

十 ちやうしが事にて兄弟たすかる事……………四七六

十一 兄弟曾我へ歸り喜びし事……………四七九

卷第四

一 十郎元服の事……………四八一

二 箱王箱根へ上る事……………四八一

三 鎌倉殿箱根御參詣の事……………四八三

四 箱王祐經に遭ひし事……………四八六

五 眉間尺が事……………四九一

六 箱王曾我へ下りし事……………四九四

七 箱王が元服の事……………四九七

八 母の勘當かうぶる事……………五〇〇

九 小次郎語ひ得ざる事……………五〇五

十 大磯の虎思ひ染むる事……………五二二

十一 平六兵衛が喧嘩の事……………五二三

十二 三浦のかたかひが事……………五二七

十三 虎を具して曾我へ行きし事……………五三〇

卷第五

一 淺間の御狩の事……………五三五

二	五郎と源太と喧嘩の事	五三八
三	和田より雑掌の事	五三〇
四	三原野の御狩の事	五三二
五	那須野の御狩の事	五三五
六	朝妻の狩座の事	五三六
七	帝釋と阿修羅王戦の事	五三八
八	三浦與一を頼みし事	五三九
九	五郎女に情懸けし事	五四五
十	巢父許由が事	五四八
十一	貞女が事	五四九
十二	鴛鴦の劔羽の事	五五〇
十三	五郎が情かけし女出家の事	五五一
十四	吳越の戦の事	五五二
十五	鶯と蛙の歌の事	五六七

卷第六

一	十郎大磯へ行て立聞の事	五六九
二	和田義盛酒宴の事	五七〇
三	ふん女が事	五七四
四	辨財天の事	五七九
五	朝比奈虎が局へ迎にゆきし事	五八〇
六	虎が盃十郎にさしぬる事	五八五
七	五郎大磯へ行し事	五八七
八	朝比奈と五郎力競の事	五八九
九	曾我にて虎が名殘惜みし事	五九一
十	山彦山にての事	五九七
十一	比叡山始の事	五九九
十二	ぶつしやうこくの雨の事	六〇二
十三	嵯峨の釋迦作り奉りし事	六〇三

卷第七

一	千草の花見し事	六〇五
---	---------	-----

二	小袖乞の事	六〇七
三	しやうめつ婆羅門の事	六二〇
四	斑足王の事	六二二
✓五	母の勘當宥さるゝ事	六二六
六	李將軍が事	六四四
七	三井寺の智興大師の事	六二七
八	泣不動の事	六三一
✓九	鞠子川の事	六三三
十	二宮の太郎に逢ひし事	六三五
十一	矢立の杉の事	六三七

卷第八

一	箱根にて暇乞の事	六三九
二	同く別當に逢ふ事	六三九
三	太刀刀の由來の事	六四〇
四	三島にて笠懸を射たる事	六四四

五	浮島が原の事	六四五
✓六	富士の狩場への事	六四六
七	源太と重保が鹿論の事	六四九
八	燕の國旱魃の事	六五二
九	新田が猪に乗る事	六五三
十	船の始りの事	六五八
✓十一	祐經を射んとせし事	六五九
✓十二	畠山歌にて訪はれし事	六六三
十三	館廻りの事	六六五
✓十四	祐經が館へ行きし事	六六六
十五	屋形の次第五郎に語る事	六七二

卷第九

✓一	和田の館へ行きし事	六七七
二	兄弟館をかへし事	六八〇
三	曾我への文かきし事	六八一

四	鬼王團三郎曾我へ歸りし事	六八二
五	悉達太子の事	六八五
六	兄弟出立の事	六八六
七	館々の前にて咎められし事	六八七
八	波斯匿王の事	六九〇
九	祐經館をかへし事	六九二
十	祐經討ちし事	六九三
十一	王藤内を討ちし事	六九五
十二	祐經にとがめを刺す事	六九六
十三	十番斬の事	七〇一
十四	祐成討死の事	七〇六
十五	五郎召捕らるゝ事	七〇八

卷第十

一	五郎御前へ召し出され聞召し問はるゝ事	七二三
---	--------------------	-----

二	犬房が事	七二三
三	五郎が斬らるゝ事	七二四
四	伊豆次郎が流されし事	七二六
五	鬼王團三郎曾我へ歸りし事	七二七
六	同じく彼者共が遁世の事	七二九
七	曾我にての追善の事	七二九
八	禪師法師が自害の事	七三三
九	京の小次郎が死する事	七三六
十	三浦の與一が出家の事	七三七

卷第十一

一	虎曾我へ來りし事	七三九
二	母虎を具して箱根へ上りし事	七四三
三	鬼の子捕らるゝ事	七四五
四	箱根にて佛事の事	七四八
五	贅女が一燈の事	七五四

六	菅丞相の御事……………	七五六
七	兄弟神にいはるゝ事……………	七五七

㊦ 卷第十一

一	虎箱根にて行き別れし事……………	七五九
二	井出の館のあと見し事……………	七六〇
三	手越の少將に遇ひし事……………	七六三
四	少將出家の事……………	七六四
五	虎と少將法然に逢ひ奉りし事……………	七六六
六	虎大磯に閉ぢ籠りし事……………	七六六
七	母と二宮の姉大磯へ尋ね行きし事……………	七六六
八	虎出逢ひ呼びいれし事……………	七六八
九	少將法門の事……………	七七二
十	母と二宮行き別れし事……………	七七六

義經記

卷第一

一 義朝都落の事

利仁―左大臣藤原魚名六世の孫鎮守府將軍
下野の―下野守
おさあい―幼者

本朝の昔を尋ねれば、田村、利仁、將門、純友、保昌、賴光、漢の樊噲、張良は、武勇といへども、名をのみ聞きて目には見ず。眼前に藝を世にほどこし、萬事の目を驚かし給ひしは、下野の左馬頭義朝の末の子、源九郎義經とて、我が朝にならびなき名將軍にておはしけり。父義朝は、平治元年二月廿七日に、衛門督藤原信賴卿にくみして、京の軍に打ち負けぬ。重代の郎等ども、みな討たれしかば、その勢二十餘騎になりて、東國の方へぞ落ち給ひける。成人の子共をばひき具して、おさあいをば都に捨てよぞ落ちられける。嫡子鎌倉の惡源太義平、二男中宮大夫進朝長十六、三男兵衛佐賴朝十二に

なる。惡源太をば北國の勢を具せとて、越前へ下す。それも叶はざるにや、近江の石山寺に籠りけるを、平家聞き付け、難波妹尾をさし遣して生捕り、都へ上り、六條河原にて斬られけり。弟の朝長も、せんぞくが射ける矢に、弓手の膝口を、したよかに射られて、美濃國青墓といふ宿にて死にけり。その外子共、方々に數多ありけり。尾張國熱田の大宮司の女の腹にも、一人ありけり。遠江國蒲と云ふ所にて、成人し給ひて、蒲の御曹子とぞ申しける。後には三河守と名乗り給ふ。九條院の常磐が腹にも三人あり。今若七つ、乙若五つ、牛若當歳子なり。清盛、これを取つて斬るべき由をぞ申しける。

二 常磐都落の事

永暦元年正月十七日の曉、常磐三人の子共ひき具して、大和の國宇陀郡岸の岡と云ふ所に、けいやくの親き者あり。之を頼み尋ねて行きけれども、世間の亂るゝ折ふしなれば頼まれず、其國の大東寺と云ふ所に、隠れ居たりける。常磐が母關屋と申す者、楊桃町にありけるを、六條より取り出し、拷問せらるゝ由聞えければ、常磐はこれを悲み、母の命を助けんとすれば、三人の子共を斬らるべし。子共を助けんとすれば、老いたる母

けいやく
契約

李夫人—孝
武皇帝の宮
人

を失ふべし。子に親をばいかと思ひかへ候ふべき。親の孝養する者をば、堅牢地神も納受あるとなれば、子共の爲にもなりなん、と思ひ續け、三人の子をひき具して、泣くく京へぞ出でにける。六條へこの事聞えければ、惡七兵衛景清、監物太郎に仰せ付け、子どもを具して六條へ参りける。清盛、常磐を見給ひて、日比は火にも水にもと思はれけるが、いま怒れる心も和ぎけり。常磐と申すは、日本一の美人なり。九條院は、色好にておはしましければ、洛中より容顔美麗なる女房を千人めされて、その中よりも百人えらび、百人の中より十人すぐり、十人の中より、一人えらび出されたる美人なり。まことに、漢の李夫人、楊貴妃も是には過ぎじ、と覺えける。清盛御心を移され、我にだに従ふものならば、末の世には、此者共の子孫の、いかなる仇ともならばなれ、三人の子共をも助けばや、と思はれける。頼方、景清に仰せ付けて、七條朱雀にぞ置かれける。日番をも頼方がはからひにして守護しける。清盛、常は常磐が許へ文を遣されけれども、取りてだに見ず。されども、文の数も重なりければ、貞女兩夫に見えずと云ふ語にもはづれ、又世の人の誹をも思はれけれども、たゞ三人の子共を助けん爲に、馴れぬ衾のもとに、新枕を並べ給ひけり。さてこそ、常磐は三人の子共をば、所々にて成人させ給ひけ